

Title	正徹の定家受容 : その幽玄論の定立をめぐって
Author(s)	横山,正
Citation	語文. 1955, 15, p. 23-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68481
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 正徹の定家受容

# ――その幽玄論の定立めぐつて―

# 薬師寺寿

「抑於」歌道」定家を難ぜん輩は、冥加もあらず、罰をかうぶるべたきものであつた。

仕方は各派それよく一様でなかつた。拝は勿論何れの流派にも共通した現象であつた。しかしその受容の中世の和歌史を通じて、定家の一統が歌壇を壟断するや、定家崇

する第一步としたいと思う。る前提とすると共に、文学現象としての「影響」というものを解明る前提とすると共に、文学現象としての「影響」というものを解明ように彼自身の文学に生かしているかを考察し、彼の文学を定位す私はそのような正徹が定家をどのように受取り、またそれをどの

拾遺愚草

徹・正広が証本としたという奥書のある写本が所蔵されている(註歌集」(岩波文庫)の底本には正徹の奥書がみられ、図書寮には正所蔵佐々木文庫中に伝正徹筆の同書が存し(註一)、 又「藤原定家

彼が拾遺愚草を熟読していたらしいことは、天理大学附属図書館

二)ことによつても推察出来る。

をよまざらむと云々。)(微書記物語)(イ本アリ、心を古風に染て、詞を先達にならはる。たれかうた定家の書に歌に師なし。いにしてをもつて師とす云々。(以下詠 歌 大 概

毎月か

れる。

習い詞於先達,者、

これは詠歌大概の「和歌無"師匠。唯以"旧歌,為"師。染"心於古風

誰人不, 詠、之哉。」の個所を受けていると考えら

ではまずりなど。 のが、 重宝にてはあるなり。(中略)これを毎月抄と申す也。 抄なり。重宝なり。此やうにやす~~と別したることもなきも毎月御百首の書は、定家のかまくらの右府のかたへ進ぜられし

(微書記物語)

く必要がある。

まず正徹は定家のどのような書物をよんでいたかを明かにしてお

## 近代秀歌

どをばよまずと定家書きたまへり。(徹書記物語)つらゆきも、ものづよき歌のほどはよみ侍りしが幽玄抜群のほ

ず。」を受けて言つている。 こと葉つよくすがたおもしろき様をこのみて、余情妖艶の躰をよまこれは近代秀歌の「むかし貫之歌、心たくみに、たけ及びがたく、

いたか否かを明かにし難い。家の書簡、定家十体、定家の判詞のある歌合などについては読んで家の書簡、定家十体、定家の判詞のある歌合などについては読んでその他秀歌体大略などの秀歌例を示したものや、井蛙抄に伝える定これ等は正徹が読んでいた事をはつきり示しているものである。

ならに微書記物語に、定家の住吉参籠の事を述べ「此事などをかなに決定し難い。

のを読んでいた事が明かである。以上の外に正徴は、今日定家に仮託した偽書と考えられているも

愚秘抄•愚見抄

を指摘されている。石田氏は前掲の論文に於て、この両書を正徹が援用しているの

桐火桶

にうちかゝりて案じ給ひしなり。(徹書記物語) 俊成はいつもすゝけたる浄依のかみばかりうちかきて、桐火桶

という個所は桐火桶によつたと思われる。

## 未来記

歌に秀句が大事也。定家の未来記、秀句の事をいひたる也

(清巖茶話

事がわかる。として、とにかく秀句例を示したものとして彼は未来記をみていたとして、とにかく秀句例を示したものとして彼は未来記をみていたかは別によつて、当時冷泉派に於てどのような形で伝えられていたかは別

三五記

さらに注目すべきは、天理大学附属図書館佐々木文庫中に「正徹というな見解を持つていたのではなかろうか。 この奥書によつて、正奥書本三五記」が存する事である(註四)。 この奥書によつて、正奥書本三五記」が存する事である(註四)。 この奥書によつて、正奥書本三五記」が存する事である(註四)。 この奥書によつて、正奥書本三五記」が存する事と、東野州開書で伝える如く当時の二条派書の援用を試みている事と、東野州開書で伝える如く当時の二条派書の援用を試みている事と、東野州開書で伝える如く当時の二条派書の援用を試みている事と、東野州開書で伝える如く当時の二条派書の援用を試みている事と、東野州開書で伝える如く当時の二条派書の援用を試みている事と、東野州開書で伝える如く当時の二条派書の援用を試みている事とを思い合せば、他の偽書に対してもがそれ等を偽書としている事とを思い合せば、他の偽書に対してもがそれ等を偽書としている事とを思い合せば、他の偽書に対しても似たような見解を持つていたのではなかろうか。

援用を試みている点に注目しなければならない。定家の所説をよみ取り得るものとしてそれ等をよみ、またしばんくされているものを、全然疑いを持たなかつたのではないとしても、とにかく正徹は、定家の著作の多くをよんでいたが、今日偽書と

註一、竹柏園蔵書誌参照

註二、図書寮典籍解題文学編参照。

註三、「定家偽書発生の径路」(国語と国文学二八巻一二号)

**註四、すでに田中裕先生が「定家仮託書の批判」(国語国文二** 

二巻一〇号)に奥書の全文を紹介された。

#### \_

のように理解していたかを考えてみよう。 正徹の定家受客の仕方を考えるについて、はじめに作品自体をど

れ等は彼が、恋の歌人として定家に傾倒していた事を示している。(徹書記物語)」というような言葉が彼の論書にしばん〜見られ、そ「恋歌には、 定家の歌ほどなるはむかしよりあるまじき なり。

作者の歌は、詞の外に面かげがそひて、何となくうち詠てあはそして定家の恋歌について彼は、

れに覚ゆる也。六百番に、寄、猪恋

うらやましからずと也。哀なる心也。(清巖茶話)せで心を尽すも、よゝの契りなれば、わが臥猪のやすくゐるも心は終日恋ひ悲しびてなげくもひとのかたみ、よるは終日ねもうちやまずふすゐの床はやすくともなげくもかたみねぬも契を

歌を理解していたのである。こよなく賞したのであり、またそのようなものとして彼は定家の恋と云つている。即ち余情としてあはれな情調が脈打つているが故に

の深所で人々の魂をえぐり出すようなものとして理解鑑賞しているいる。こゝに「もみにもうだる歌ざま」と、その情調の深さを、心なしさも、 いふかぎりなく、 もみにもうだる歌ざま也。」と評してなしさも、 いふかぎりなく、 もみにもうだる歌ざませ。」と評してなしさも、 いふかぎりなく、 もみにもうだる歌ざませ。」と評してなしたも、 いる。 定家が母を失つた時の歌「玉ゆらの露もなみだもとゞまらずなる。 定家が母を失つた時の歌「玉ゆらの露もなみだもとゞまらずなる。 定家が母を失つた時の歌「玉ゆらの歌に止まらなかつたと思われ

らなンがに注意すべきである。(勿論屈折した麦現手法の面もさしてはい

このような理解の上に立つて、「ねざめなどに定家の歌を思ひ出このような理解の上に立つて、「ねざめなどに定家の歌を思ひ出このような理解の上に立つて、「ねざめなどに定家の歌ほどなる事はなき也)(清殿茶話)」という複雑な心情、情調を表わすに適した屈折した表現によつて、なされ現されていると考えるのである。それは勿論直線的なものでなく、現されていると考えているのは云うまでもない。「定家々集を御覧さぶらなれる。身もだえするような心情が表まった。「おざめなどに定家の歌を思ひ出このような理解の上に立つて、「ねざめなどに定家の歌を思ひ出このような理解の上に立つて、「ねざめなどに定家の歌を思ひ出

作る歌人として正徹は定家を理解していたと思われるのである。ている歌―そして恋の歌にその特色が集約的に現わされている―をわし、さらに人々の心をもえくり出すような心情を余情として蔵し要するに、複雑な心象をそれに応じた屈折した表現によつてあら

### Ξ

歌論の中にどのように定家を受入れたか。それを考える前に、

まず

さて以上のような歌人として、定家を理解していた正徹は、

のをいはねどもさすがに物おもひゐたる気色は、可ご知なり。またうつくしき人の、物おもひゐたるに、歌をばたとへたる物なり。自してなにともいはれぬ所のあるが、無上のうたにて侍るなり。眉目してなにともいはれぬ所のあるが、無上のうたにて侍るなり。顧白とがかやうに行雲廻雪の体とて雪の風にふかれゆきたる体、花に霞彼の歌論の中核をなしている幽玄について考察してみよう。

してのあるかなきかの情感が、縹渺としてたゞよう所に幽玄があつている。幽玄とは何よりも余情のある事が必須条件である。余情とひのこしたる体なるがうたはよきなり。(微書記物語)」と彼は云つ心ざしはあれども、さだかにいひやらぬにもたとへたり。さればいをさな子の二つ三つなるが、物をもちて、人にこれ/~といひたる

そこに幽玄体があり得たのである。 こゝにはすでに風巻氏が指摘されているように無名抄の叙述とた。こゝにはすでに風巻氏が指摘されているように無名抄の叙述とた。こゝにはすでに風巻氏が指摘されているように無名抄の叙述とた。こゝにはすでに風巻氏が指摘されているように無名抄の叙述とた。こゝにはすでに風巻氏が指摘されているように無名抄の叙述とた。こゝにはすでに風巻氏が指摘されているように無名抄の叙述とた。こゝにはすでに風巻氏が指摘されているように無名抄の叙述とた。こゝにはすでに風光氏が指摘されているように無名がののである。

うにモディファイしてしまつたのであろうが、要するに正**徹の**幽玄 置きかえた事である。おそらく記憶をたどつて無意識の裡にこのよ が妖艷という語をどのように考えていた かを知る事が出来 ない た は、彼の理解した意味に於ては、妖艷と同意義であつた。ただ正徹 四)、定家が近代秀歌で「余情妖艷」と云つたのを、「幽玄抜群」 る。そしてこゝで注意すべきは、すでに指摘されているように(註 物哀れ」なものであつても、それだけでは幽玄ではなかつたのであ 情があるだけでは幽玄に価しないのであり、またその情美が単に「 きも、ものづよき歌のほどは、よみ侍りしが、幽玄抜群のほどをば るはものあはれなる体などを、幽玄と申すなり。心得べし。つらゆ 正しくその位にのりゐて納得すべき事にや。人のおほく幽玄なる事 よまずと定家書きたまへり。( 徹書記物語)」と述べているように余 よと云ふをきけば、たゞ余情の体にて、さらに幽玄にはあらず。 またそのような表現によつてもたらされた情美は、「幽玄体の事、 \_ と ぁ

さらに彼は、「月にうすぐものおほひ、花に霞のかゝりたる風情め、これ以上厳密に追求する事が出来ない。

「やさしさ」の方向にあつたのである。き」とか、「ふとくたくましき」とか云つた方向ではなく、いわばとの外なる也。(微書記物語)」と云つ てい る。 それは「ものづよは、詞心にとかくいふ所にあらず。幽玄にもやさしくもあるは、こは、詞心にとかくいふ所にあらず。幽玄にもやさしくもあるは、こ

「南殿の花盛りに咲きみだれたるを、絹袴着たる女房四五人ながらん風情を幽玄体といふべきか。(清巖茶話)」という譬喩をみめたらん風情を幽玄体といふべきか。(清巖茶話)」という譬喩をみめたらん風情を幽玄体といふべきか。(清巖茶話)」という譬喩をみれはいつこが幽玄ぞといふにも、いづくといひがたき也。それを心たるや、山の紅葉に秋の霧のかゝれる風情を幽玄の姿とする也。こたるや、山の紅葉に秋の霧のかゝれる風情を幽玄の姿とする也。これはいづく本アッ(本アッ)、清きは、いづくといひがたき也。それなむせれば、そこにはむしろ華麗さに近いものが考えられる。それはむせれば、そこにはむしろ華麗さに近いものが考えられる。それはむせれば、そこにはむしろがあるこそがもしろけれともいはむくは、当理なり。(清巖茶話)」と彼は云つて形成されば、「南殿の花盛りに咲きみだれたるを、絹袴着たる女房四五人ながといるのでは、またいといる。

らない。
く、一ひねりひねつた時代的な契機を蔵しているのを見逃してはなく、一ひねりひねつた時代的な契機を蔵しているのを見逃してはななく、いわばそれをしおつたものであり、古典的情美そのまゝでなる、いわばそれをしおったものでありな意味に於て、正徹の幽玄は単なる華麗な美そのもので

彼は先人の作品としては、あつた。それは彼が幽玄と評した作品を見る事によつて明らかで、あつた。それは彼が幽玄と評した作品を見る事によつて明らかで、は、みめうるわしき人の物おもいにふけつている世界―恋の世界で以上のような景情によつて表象される幽玄は、人間的世界に於て

いきてよもあすまで人はつらからじ此の夕暮をとはばとへかしいきてよもあすまで人はつらからじ此の夕暮をとはばとへかし白妙のそでのわかれに露落ちて身にしむ色の秋風ぞふく(定家)

卿女) あはれなる心ながさの行衛とも見し夜の夢を誰か定めむ(俊成(我子内親王)

は(宮内卿) 聞くやいかにうはの空なる風だにもまつに音するならひありと

だえする苦しみが唯美化され永遠化され、夢幻的な世界となり、身などの歌八首を拳げているがすべて恋の歌で占められている。身もがな(源氏物語)

も心もそゞろ吸いこまれて行く物狂おしいまでの陶酔境である。

に恋の心であり、夢幻的な晦渋な作品と云えよう。 に恋の心であり、夢幻的な晦渋な作品と云えようで、同様どりける春や昔の袖の涙に(新古今)」をふまえているようで、同様の歌を本歌としてふまえたものであり、源氏物語という王朝的な古典的な契機が導入されると共に、複雑な景情にはかない恋の心がと典的な実機が導入されると共に、複雑な景情にはかない恋の心がと典的な妻機が導入されると共に、複雑な景情にはかない恋の心がとの歌を本歌としてふまえたものであり、夢幻的な晦没な作品と云えよう。

さ珍らしさを極力追求する一種の新奇主義・珍奇主義的な傾向を持ひ合はせじ」とする彼の作品は、新造句や新題を創始する等、新しといつた言葉を用いている「さゝめごと」に伝える如く、「人に云は作品に自註を附して、「風情珍し」「珍し」「新し」「面白し」しかし彼にとつてこうした幽玄の世界がすべてではなかつた。彼

所に生れた世界であつた。 が、それによつて新しさ珍しさをめざす力をセーヴし屈折させたないのであるが、しかし所詮その幽玄は古典的モメントを充分に持ければならない(註六)。 つまり彼は単に幽玄だけの歌人ともいえ措辞によつて面白さをねらつた作品が数多く存することも注目しな力と共に、乱暴とさえ思われる大胆な掛詞縁語などの技法を用いたつと共に、乱暴とさえ思われる大胆な掛詞縁語などの技法を用いた

つて、いわばセーヴされた所に成立つていた。 を打ちしおつた「月にうす雲がたなびき」「花に霞のかゝつた」景だえくるしむ心情が夢幻的に唯美化され昇華されたものであつた。情によつて表象されるものであつて、人間的世界に於ては、恋にも情によつて表象されるものであつて、人間的世界に於ては、恋にもを打ちしおつた「月にうす雲がたなびき」「花に霞のかゝつた」景やさしさ」の方向にその美を表出したものであつて、それは華麗さやさしさ」の方向にその漢を表出したものであって、それは華麗さいと、いわばセーヴされた所に成立つていた。

註一、前揭論文

二章など。

主四、久松潜一博士「日本文学評論史」古代中世編・第二編第で事が指摘された。(「日本文芸学」所収「正徹の風体」)

主三、すでに岡崎義恵博士によつて彼の作品が象徴的傾向を持註二、後掲の愚秘抄・三五記の引用参照。

註六、斎藤清衛博士「草根集の考察」(国語と国文学九巻一○けであり、そこに時代的な契機を見る事が出来る。けであり、そこに時代的な契機を見る事が出来る。からで、資質している。兼好の美意識に相通ずるものがあつたわま五、彼は徒然草の「花はさかりに月は云々」の条をあげて兼註五、彼は徒然草の「花はさかりに月は云々」の条をあげて兼

\_\_

註一)が存するので必要最少限度にとゞめておく。 この点についてはすでに谷山茂氏や能勢朝次博士のすぐれた論考へのある諸書を中心に定家の云う幽玄について考える必要があるが、事が出来る。そうした意味で、まず第一項で挙げた書目中、信証性うか。それは定家の幽玄の概念と対比させる事によつて明かにするり出上のような彼の幽玄論は、定家をどのように受継いだのであろ以上のような彼の幽玄論は、定家をどのように受継いだのである

即ち基本的歌体であつた(毎月抄)。 定家に於て「幽玄様」は有心体・事可然様・麗様と共に「もとの姿」

向に於て矛盾対立するものではないと考えられる。断じ得ないとしても、少くともそうしたものは幽玄と美の基本的方すかさ、さびしさは、幽玄そのものの属性を表わしているか否かはもかげかすかに、 さびしきやうなり。」によれば、心象の細み、かそして近代秀歌遣送本の俊頼の歌に附された註「是は幽玄に、お

用すると共に、

たものであり、他方は、やさしさ―その底に愛欲的世界を秘めたう一方は一抹のさびしさ―人間の愛欲的な世界にかゝわらないからび反する事はないとしても、表象構成された美世界のその方向に於て、反する事はないとしても、表象構成された美世界のその方向に於て、をれば正徹の云う幽玄とは、「おもかげかすか」という点では相で存在すると考えられる。

正徹はたしかに近代秀歌をよんでいたし、またそれを受入れようちかすむ世界であつて、相関わるものではない。

とにはならなかつた。
に於てどうであろうとも、結果的には定家自身の幽玄を受入れたこに於てどうであろうとも、結果的には定家自身の幽玄を受入れたこをよみ取つたのである。そのような意味で、正徹はその主観的意図と解したのであり、いわば著しく自己に引入れるよみ方で定家歌書としていたにちがいない。しかし彼は前述の如く定家の幽玄を妖艶としていたにちがいない。しかし彼は前述の如く定家の幽玄を妖艶

最秘抄を見ると、幽玄を行雲・廻雪に分けて、文選の高唐賦を引幽玄からどのように影響を受けているかを考えなければならない。れている定家が存在した。即ち次に正徴は、前掲書目中の仮託書のれている定家が存在した。即ち次に正徴は、前掲書目中の仮託書の

しかし正徹の時代にはもう一人の定家即ち偽書群によつて構成さ

廻雪とは申侍べきにや。かに飛雪の、いたくつよからぬ風にまよひちる心ちせん歌を、かに飛雪の、いたくつよからぬ風にまよひちる心ちせん歌を、雲と申べし。又やさしく気色ばみてたゞならぬが、しかもこま山やさしくけだかくして、薄雲の月を帯びたらん心ちせん歌を行

のである。
のである。
説明的な平板な叙述であるが要するに、薄雲が月をと云つている。説明的な平板な叙述であるが要するに、薄雲が月をと云つている。説明的な平板な叙述であるが要するに、薄雲が月をと云つている。説明的な平板な叙述であるが要するに、薄雲が月をと云つている。説明的な平板な叙述であるが要するに、薄雲が月をと云つている。説明的な平板な叙述であるが要するに、薄雲が月をと云つている。説明的な平板な叙述であるが要するに、薄雲が月を

②たゞ人門幽玄にやさしからむと思ひて、しかもたゞしくよみ習また桐火桶には俊成が語つたとして、

S.

いる事がよみとれる。 ノニムではないが、幽玄は「やさし」に似通つた美的方向を持つてとあるが、幽玄とやさしが並列されている所からすれば、両者はシ

さらに三五記をみれば、

(3)所詮幽玄といはるゝ歌の中に、なほ勝れて、薄雲の月をおほひ、がなれとて、初心の時しめし給し体なり。されば歌には、やさいなれとて、初心の時しめし給し体なり。されば歌には、やさいなれとて、初心の時しめし給し体なり。されば歌には、やさいなれとて、初心の時しめし給しながら、是こそ和歌のほんがいなれるよれい。

然) では、「やさしさ」を志向していることが自期の事として承認されているのを読みとる事が出来る。 この点では、 すべれ、その余情美は、「やさしさ」を志向していることが自期の事ととある。こゝに心詞の外に「かげ」がうかぶ事、即ち余情が強調さとある。こゝに心詞の外に「かげ」がうかぶ事、即ち余情が強調さ

度に於て一致しているのだと云わなければならない。 せたさらにこの(3)では、(1)と同じく行雲廻雲に分けられ渺茫としまたさらにこの(3)では、(1)と同じく行雲廻雲に分けられ渺茫ととされているがらは、それをさゝえている力強い主体の存在を推知な平板な叙述からは、それをさゝえている力強い主体の存在を推知な平板な叙述からは、それをさゝえている力強い主体の存在を推知という形で相当に強調(注二)されていながらも、これらの説明的という形で相当に強調(注二)されているがある、これらの説明的という形で相当に強調(注二)されているがあるように、(1)と同じく行雲廻雲に分けられ渺茫としまたさらにこの(3)では、(1)と同じく行雲廻雲に分けられ渺茫としまたさらにこの(3)では、(1)と同じく行雲廻雲に分けられ渺茫としまたさらない。

集・冬)の一首だけであり、これも恋の情調をふまえた作品であるそになるみのかたおもひ思はぬ浪になく千鳥かな」(秀能・新古今首(註三)のうち、勅撰集で恋の部類に入らないのは「風吹けばよこれをさらに例歌によつてみれば、三五記に幽玄として挙げた九

が一首も存在しないのと明瞭に対比される(註五)。 そしてそれは定家自身が幽玄とする歌に、恋の色調を帯びたもの

考えて同一方向にあるものではなく、また定家自身が考えた以上にりな情調は、定家自身が考えた幽玄とその美の基本的方向などから・述懐的な抒情を下にふまえたものだと考えられる。そしてそのよ「やさし」の方向にある情調をふんわりとつゝんだものであり、恋以上要するに偽書群の幽玄は、茫漠とした表現の中に余情として

**註一、「幽玄の研究」「幽玄論」強調されていると思われる。** 

十八首と最高を示しているのも偶然とは云い難い。値的な意味あいがこめられている。また定家十体の例歌は五こめずに云われているが、この「ほんい」という語には、価註二、毎月抄では「もとの姿」とことさら価値的な意味あいを

首あり、類従本は一首脱したと思われる。 註三、群書類従本には八首しかないが、正徹奥書本などには九

で述懐的な傾向を持っものが計一二首、秋六首春五首等となの部類に入つているものは二二首、他に哀傷・雑・別離などの密接さを示している。例歌五十八首のうち勅撰集に於て恋なおこの九首はことごとく定家十体にもあり、両書の関係

究続編」に指摘されている。 がたく、混然としていた事が小島吉雄博士の「新古今集の研註四、新古今時代に於て、恋歌と叙景歌などとは割然と区別し

関する限り信じ得ない。 関する限り信じ得ない。

#### 五

しまうのは危険である。 しまうのは危険である。 しまうのは危険である。 しまうのは危険である。 しまうのは危険である。 というような言葉で規定しそれ以上の のに書の影響を受けてその幽玄論をうちたて、両者はほゞ同様の概 のに書の影響を受けてその幽玄論をうちたて、両者はほゞ同様の概 のに書の影響を受けてその幽玄論をうちたて、両者はほゞ同様の概 のにいってい。 というような言葉で規定しそれ以上の というような言葉で規定しそれ以上の というような言葉で規定してれ以上の というような言葉で規定してれ以上の というような言葉で規定してればに定家の は、外形 というは、といった類型概念でひつくるめて というような言葉で規定してればに定家の は、外形

がたいのは、詩精神の裏づけが欠除しているためではなかろうか。いるようでありながら、その中核或は生命的なものを明確に推知し

事実仮託書の幽玄は、その外形的な輪廓はかなりはつきりとして

と云える。そのような意味で多くのもの、本質的なものをつけ加えそれに解釈を与え、詩精神の裏づけによつて生命力を賦与したのだそして正徹はそのような仮託書の幽玄から所謂「影響」を受けて、

ているのである。

の定家の一面に近づき、彼の歌論の中核をなす幽玄論を形成し得た多く学びながらも、こうした唯美精神を吹込むことによつて、本物あらわし、読む者の魂をゆりうごかす歌人として理解していたのであらわし、読む者の魂をゆりうごかす歌人として理解していたのであらわし、読む者の魂をゆりうごかす歌人として理解していたのである。そしてこのような正徹の理解した定家は、決して定家の全面ある。そしてこのような正徹の理解した定家は、決して定家の全面ある。そしてこのような正徹の理解した歌人としての定家のと云えよう。前述の如く彼は定家対する理解内容を思いおこせばよいであろう。前述の如く彼は定家対する理解内容を思いおこせばよいであろう。前述の如く彼は定家対する理解内容を思いおこせばよいであろう。前述の如く彼は定家対する理解内容を思いおこせばよいである。

巨視的な視点から見た場合、どこにあるのであろうか。感の必然性が考えられねばならない。このような共感の必然性は、かゝる事が可能となつたその基底には正徹の定家に対する強い共

時代ではなかつた。影がうすくなつたとは云え、まだどこかに余映にき工前美への憧憬が作用しているのを指摘しておいた。すでに現実に存しないものに憧れていたわけである。この点今群細に述べる実に存しないものに憧れていたわけである。この点今群細に述べる実に存しないものに憧れていたわけである。この点今群細に述べる大部がないが、新古今撰進に至る時代の定家も、同様に王朝美に対する熱烈な信者であり、徹底した芸術至上主義者であつた。して、古典趣味とも云うだって彼の幽玄論形成の重要なモメントとして、古典趣味とも云うだって彼の幽玄論形成の重要なモメントとして、古典趣味とも云う

残映に死物狂いでしがみついていたわけである。こゝに両者の根本 を残していた時代である。そしてそれが失われようとする時、その

的な差異を認める事が出来る。 や和歌文学の大詰にまで来ていた当時、彼の努力もそれに飛躍的な その中に没入し、唯美の殿堂を築こうとしたのである。彼自身決し えられた文学としての和歌の世界にあつて、特に前半世はひたすら うに、一歩もその埓外に出ようとはしなかつたのである。目前に与 云え、亡びゆく貴族の一員であり、すべての生活基盤も亦そのよう て停滞やたゞ徒らな完成度の高さだけを求めたのではないが、もは な所に持つていた。そして当時の宮廷貴族がすべてそうであつたよ 定家は、現実から目をそらして彼自身明確に意識しなかつたとは

発展をもたらすという事は全く不可能であつた。 朝的な夢幻的な美の世界を構成した作品となつたのである。 方法によつて、景情に新しい秩序を与え、象徴的手法によつて、王 していた当時として、その中でのあたうる限りの努力が、彼独特の いわば古代的な貴族詩としての和歌ジャンルの発展的終局に位置 一方正徹はその生活に於て、世を時めく武士的世界に意識的につ

義的な一群の作品となり、また新造句や縁語掛詞などを多用して面 努力は、彼の求めた独特の幽玄美となり、また晦渋きわまる構成主 てを追求するというみじめな努力を試みたと云えよう。そしてその に落入つていた和歌ジャンルにあくまでも固執し(註二)、ぎり~~ 古今集以来次第に下向線をたどり、もはや使い古されマンネリズム 美麗な夢を築きあげる契機としての意味しか持たなかつた。彼は新 ながりを求めていた(註一)。そのような彼にとつて王朝美追慕は、 にその極限を追求して行つた。つまり和歌ジャンルの中で、その果

> る。 白さと珍奇さとを求めた一群の作品系列となつて現われ たの で あ

あつた。(しかも彼はその古典的情美を時代的な打ちしおつたもの 徹にあつては、古典的情美追求の契機として、氷結し眺めた世界で で云えば、和歌ジャンルの中での極限追求のあくなき努力と、手法 定家にあつてはその中に身をおよがせながら求めた世界であり、正 ため、現象的には共通していると思われる王朝的な夢幻の世界も、 として象徴主義的な方向をとつた事に対する共感である。 た必然性が存し、そこに共感が流れていたと云えよう。それは一言 しかしながら前述のように、本来異つた場所での極限追求である 以上のような両者の交錯する地点に、正徹をして定家に共鳴させ

ては、極限追求の努力を中核にしたものであつた。 には、共感をさゝえる共通の基盤が予想される。それは正徹にとつ 立つ影響(これが本当の意味での文学現象としての影響であろう) 記物語)と云つている。彼が云う如く風骨を来びとる事によつて成 いたき事也。いかにも其風(骨)心づかひをまなぶべき也。 正徹は「其風をまなぶとも、てにをは詞をにせ侍るは、かたはら

に変容したのである)

ものであり、作品解釈にさゝえられて自己を投入する事によつて成 て受取るのである。正徹の理解した定家は実は定家の半面であり、 響者の文学を被影響者のもの―いわば自己の背丈にあうもの―とし また彼の歌論の中核をなす幽玄は、実は直接には偽書を契機とした しかしまた文学享受の必然として、被影響者の影響者理解は、影

またそうした自己投入によつてこそ、正徹は、定家の悪しき意味

藤原隆景氏「正徹年譜」(国語と国文学八巻七号)「招月庵正註一、彼は備中小田の地頭職紀氏小松康清の子として生れた。でのエピゴーネンたる事から救われたのである。

上層武士との交りを求めていたとも考えられる。りを結んだ事を指摘されている。逆に云えば、正徹は多くのりを結んだ事を指摘されている。逆に云えば、正徹は多くの変巻四第三七章に於て、当時の多くの大名が正徹と文学上の交徹論」(吉備文化三号)。また辻蓋之助博士は「日本文化史」藤原隆景氏「正徹年譜」(国語と国文学八巻七号)「招月庵正藤原隆景氏「正徹年譜」(国語と国文学八巻七号)「招月庵正

註二、たとえば「なぐさめ草」の中で、連歌は老後のなぐさめ

程度のものだとしている等、彼はひたすら和歌に打込んでい

たようである。

—— 大阪大学大学院学生 —

32